

# 小池辰雄記念図書室だより

2017, 2. 10. (金) NO. 35 千葉市若葉区都賀 3-24-8-4F 小池辰雄記念図書室発行

## 1. 各地の読書会

「若き日に汝の救い主を覚えよ」

長野 初美(余市)

2013年2月まで3年間、私はこの図書室の立ち上げから仕事をさせていただいた。転勤になるこの年のお正月には、長男一家が大阪から千葉の図書室に来てくれ、母親の仕事場をこの目で見たいと言うので案内したら、しげしげと書物を見ていた彼曰く、「この人はどうしてこんな立派な図書室に自分の持っている本を納められて記念されるのだろう。」

この話は「小池辰雄記念図書室便り」第10号にも書いたが、私の印象に深く残っている。確かに、ノンクリスチャンの目には不思議と写るらしい。人の上に立つ人、人より秀でた人を価値ありとするのが世の流行の価値観である。しかし、如何に大きく強くなって自分をひけらかすかではなく、如何に「無」になって自分を投げ出すかがクリスチャンの願いだということだから、価値観がまるっきり逆転している。

クリスチャンは喜んで人のために犠牲を払い、人のために死ぬという。人は自分が損をしたり犠牲を強いられたりするなんて真っ平なはずなのに…。如何に己を捨てるか、無になって人を立て上げるか、を一生のテーマとして掲げ続けて求道した人。世の価値観とは真逆の価値観を「無の神学」として打ち立てた人、それが小池辰雄先生だった。

札幌キリスト召団はこの小池神学「無の神学」を土台としている。それは、また「愛の神学」と言ってもよい。「無」にならなければ愛せないからだ。恵泉塾のような生活共同体の中で我が曝け出されて裸になり、愛せない我にいやというほど気づかされ、自分が何者でもないことを知る。そのように己を空しくされ、砕かれた魂にこそ愛が宿り、イエスの教え通りの真っ直ぐな道を歩くことができ、正しい信仰の継承者となれるという教えである。

人間の本当の価値は造り主が決めておられる。神は一人ひとりどんな人をも大切に考え、その人に相応しい持ち場を与えておられる。いわゆる世の価値観に染まらないでこの神の価値観に

立てば、自分にも生きる価値があると気づいて消えることのない永遠の命の希望が宿るだろう。

大学は出たけれど、何のために勉強するのか、何のために生きるのか、人生目的も漠然としたまま就職・結婚を経て二児の父となり、この世で懸命に生きる道を模索している長男を見ると、小池神学を生活実践して教育してあげればよかった、と今さらにして思う。

「無の神学」を恵泉塾で生活実践した水谷先生には、この真理のバトンが確実に手渡され、その感謝が溢れて小池辰雄記念図書室に結実した。それほど宝がこの信仰には隠されているのだ。子や孫に、若者に、「若き日に汝の造り主を覚えよ」と心から伝えたい。

## 小池辰雄を読む会

### ●余市「無の神学」

2017年2月5日(日) 13:30~15:00

2017年3月5日(日) 13:30~15:00

余市郡余市町豊丘町 370-9 恵泉祈りの家

\*会費:無料(自由献金)

\*連絡先:0135-23-9222(木下)

### ●札幌「無者キリスト」

2017年2月4日(土) 13:30~15:00

2017年3月4日(土) 13:30~15:00

札幌市南区川沿10条 3-10-5 札幌祈りの家

\*会費:無料(自由献金)

\*連絡先:011-571-2348(浅井)

### ●都賀「聖書の人ルター」

2017年2月18日(土) 10:00~12:00

2017年3月18日(土) 10:00~12:00

千葉市若葉区都賀 3-24-8 都賀プラザ 5F

\*会費:1000円

\*連絡先:043-235-3815(石丸)

\*準備のため、出席のご連絡をお願いします。

\*予習不要・初心者歓迎

**本図書室は献金で運営されています。**

**図書室便りは隔月発行です。**

### 60歳の峠、人生の後篇を疾走

辰雄が還暦を迎えた甲辰の年は東京大学を定年となるので、1964(昭和39)年2月4日、最終講義「宗教と文化」が行なわれた。いわば還暦記念講演だ。

彼はどんな授業においても、福音的な角度で宗教的な何ものかを伝えようと心がけてきた。その彼の悲願靈願はそれとなく学生間にも伝わり、「小池」といえば「宗教」という靈風が、学生の脳裏をかすめるようになっていたらしい。

東大駒場730番講堂は超満員であった。彼はまず、黒板を世界地図に見立てて、西に▽、東に○を描いた。

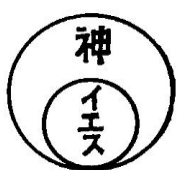
西洋文化の性格は正・反・合の論理的思惟形式を象徴するもの、合理性や組織や体型といった角度であり、それを▽であらわす。これに対して、東洋文化の性格は円味を帯びていて、論理ではなく直観的、内観的で、合理でなく非合理、または超合理だ。ある中心といったものをめぐって流転する相、無限に円現していく相を持っているので、これを○であらわす。この西洋と東洋の対比から、最終講義は始まった。

内村鑑三の『求安録』の中にある、次の句を引用する。

「信ずるは他に許すなり。即ち己を捨てて他に任すなり。而して我は我の愛する人に我を任すなり…」

辰雄はこれを解説して、「わが生を、我を愛する者(神、キリスト)に、棄て身で全托すること、それが真に生きる道である。ちょうど乳呑児が、母の胸に自分をとっぴり抱きこまれるように、祈りをもって己を靈的に神のふところに投げ身することが、信ずるといふことだ。イエスはそのように、神のふところの中に魂を投げ入れて生きていた人間だ。彼が、父よ！と言って祈りかかるときは、すでに神のふところの中で祈っているのだ」と、二重の円の、「1図」を描いて見せた。

我らがキリストの十字架の贖罪にあづかっているならば、キリストの中に、はばかりずして入ることができる。これが絶対恩寵である。パウロが「我キリストの中に」とか「キリストわがうちに」という表現を、百何十回も書翰の中で告白している事態、それが「2図」なのだ…と。



1図



2図

1時間の講義の大意は『曠野の愛』最終号の第37号(1964年春季号)に残されている。

「語る者も聴く者も、何か天国的な雰囲気の中に溶け込んで、大変心地よいひととき」の講義が終わると花束贈呈。そのとき案内されて壇上にのぼってきた妻順子にこれを手渡した。その余韻の中、「いざ、汝若き旅人よ！」と、ドイツ語の歌が響き渡った。衛生看護科2年生全員が歌ってくれたのである。

「そうだ、私のたましいは永遠に若い。人生の後篇を迎え、まさに伝道を主眼とする旅路につこうとしているのに、これはまことにふさわしい歌と感じた」と、「最高の日」の感激を、辰雄は記している。

1964年は東京オリンピックの年だった。

「アベベに負けず、第二の還暦に向かったのマラソンを切りました」。

辰雄は、人生の後篇に突入するこの年、『曠野の愛』誌に代わる、伝道のための『曠愛新書』を年2回発行することを決意する。

その第一号は『福音の心臓』(1964年8月1日発行)で、コリント人への第一の手紙第13章＝「もし私に愛がないなら…」である。

これは1957年8月9～11日の3日間、浅間山麓小諸において開催した第5回福音夏季特別集会で彼が語ったものを文字化した。愛は何と言ってもキリスト道の心臓的なものである。

「たとい私が人間や天使の異言を語っても、もし私に愛がないなら、私はやかましい鐘や騒がしいどらとなってしまふ」(1節)

以下、「そういうわけで、いつまでもながらえるものは、信、望、愛の三者である。これらのうちで最大なるものは愛である。」(13節)

この愛の讃歌私訳と解説は我らをキリストの愛にいざなう永遠の名著だろう。



前列左から、辰雄、妻順子、次男照雄、後列中央が長男信雄、右が依田牧子(小池家を訪れるようになった1964年)